

# 令和3年度 まちづくりトーク 主な意見

開催日： 11月24日(水)

会場： 青河コミュニティセンター

## 1.地域の防災

項目	参加者の発言	市の発言
ため池や休耕田などの活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>平成30年と昨年の大雨の時にコミュニティセンター敷地内に越水したが、河川沿いにブロックを並べてもらったことにより、今年が入ってくる水が少なかった。コミュニティセンターは基幹避難所に指定されているが、水に浸かる危険がある時は西光寺に避難させてもらっている。</li> <li>下青河地区や片山地区は内水で浸かるので、流域治水の取組として、上流部のため池の調査をした。下青河地区と原田地区がため池利用のモデルになると考えている。また、青河地区には休耕田が多いことから、休耕田を治水に使えないのか。休耕田は、比較的簡単に住民が板を開け閉めできる。</li> <li>下青河地区では、付きっきりで、門の開け閉めを調整したこともあり、住家への内水被害がでなかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>青河コミュニティセンターに水が流入した際には、現地確認をした。基幹避難所ということもあり、引き続き、浸水対策に取り組んでいく。</li> <li>流域治水について、休耕田やため池の活用は、今まさに、行政としても、三次市内全域で取り組んでいきたい内容である。国を挙げて取り組んでおり、中国地方では、江の川水系の地域で流域治水の取組をはじめている。国土交通省が中心であるが、農水省が所管するため池、農地や荒廃地を活用することが防災・減災につながる。このことは、青河地区でも実証されており、県や国に対して情報共有をしていくとともに、他の地域にも普及していきたい。</li> </ul>
バイパス水路	<ul style="list-style-type: none"> <li>県の宅造規制の数値を参考に青河地区の降水量を試算した。</li> <li>市場、下青河、片山地区の内水被害は、バイパス水路で抑えることができるのではないかと。山側にバイパス水路を付ければ確実に防げると考えるが、国に要望したところ、管轄外と言われている。部分的な対策ではなく、確実に災害を防ぐため、根本的な対策を検討してほしい。青河地区に限らず、他の地域でも同じような立地が多いと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>バイパス水路は、一つの案として参考にさせてもらう。</li> </ul>
排水機能	<ul style="list-style-type: none"> <li>片山地区は、必ず内水被害があるので、ポンプを付けてほしい。危機管理課にも要望をしている。浸かり始めると孤立し、外部から様子を見るができない。</li> <li>強固な堤防により、川からの危険性はなくなっているが、内水の行き場がなくなっている。排水装置をつけてほしい。</li> <li>市場地区では、毎年のように内水被害がでる。今年7月、2軒が孤立状態となったことから、早めに消防団に排水を依頼し、水を取ってもらい助かった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>排水ポンプ等については、できることから対応をしている。三次市内でも内水被害が出る可能性が高い地域については、予め把握し、優先的に機材と人を動員しながら、対策をしている。令和元年度に市独自で購入した排水ポンプ車の運用を令和2年度から開始しており、国交省が所有する排水ポンプ車と相互に連携しながら機動的に対応している。</li> <li>また、県に対しても、北部地域に排水ポンプ車の配備していただくよう要望している。これが実現すれば、機動的な内水排除能力が向上するものと考えている。</li> <li>引き続き、三次市全域の課題である内水被害については、状況を把握しながら、その低減に努めていきたい。</li> </ul>
ため池の管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>ため池の管理について、今までの県の基準では、管理者が全責任となっていたが、責任や権利について見直しがあったのか。管理者に関する調査はあったが、その後の対応はどうなっているのか。</li> <li>青河地区のため池は古く、最近では米を作らないことから、管理者であっても責任は負いかねると考える人も増えている。行政が、何らかの形で活用していただければと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>管理等の基準については、確認させていただきたい。農業用水として使っているため池も活用したらいいと考えているが、農業をされている皆さんからの心配もある。この点に関する確実な担保があれば、農業をされている方も安心されるし、流域治水のスピード感も変わってくると思うので、県や国に対しても要望や調整をしているところである。</li> <li>使っていないため池を治水利用する際の管理については、今後どのような対応ができるのか、市として調査・研究をしたい。</li> </ul>
避難の取組	<ul style="list-style-type: none"> <li>住民は、地域避難所に避難をしている。</li> <li>各家庭に番号を振り分けて、その番号で避難場所を指定している。要介護者の避難については、各地域で2名ほど担当を選び、その方と連絡を取りながら避難を支援している。民生委員などの皆さんと協力して、サポート体制を整えている。</li> <li>自治連合会の事務局では、水害、土砂崩れ、地震に備えて、各家庭について、生活の中心である部屋や寝ている部屋まで把握をしているので、山が崩れたりした場合に探す部屋がわかる。しかし、これは個人情報であり、慎重に管理をしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>青河地区は、避難訓練の参加率が高い。市では、合併以降初めて、三次市全体での避難訓練を、関係機関と連携して実施したが、多くの市民の方に参加してもらおう方法を模索している。青河での取組も参考とさせていただきたい。</li> <li>市では、現在、各自主防災会と要支援者の避難のあり方について調整しているが、青河地区は既に確立しているように思う。</li> <li>行政の枠組みに入ることにより、本人同意や個人情報などの問題が生じてくる。なるべく今行われていることをそのまま行っていく方がいいと思う。今後、行政側が工夫できれば、その方法を他の地域にも広げていける。引き続き、ご相談をさせてもらう。</li> </ul>

# 令和3年度 まちづくりトーク 主な意見

開催日： 11月24日(水)

会場： 青河コミュニティセンター

項目	参加者の発言	市の発言
情報共有について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時に、行政側で横の連携はできないのか。青河町自主防災会から提供した情報が、行政内部で共有されていないように思う。また、災害後の調査や被害状況が共有されていないように感じる。情報の拠点となる部署を決めておいてもらいたい。</li> <li>・青河自治振興会から、被害の地図を提出したが、その後の対応については、担当部署がそれぞれ来られるので、そこを一括できないのか。災害認定を受けられない場合、他の方法を考えなければならないが、地域では、その情報を次につなげることができない。被害への対応方法について仕訳をしたものを地域に出してほしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時の情報連絡については、今年から見直した。市の災害対策本部では、昨年度まで、自主防災組織との情報伝達に関する部署が曖昧であったことから、今年から、自主防災組織と連絡をする窓口を設けて、情報共有をしている。しかし、まだ皆さんに周知されていない部分があり、市側も情報の扱いに慣れていないこともあった。自主防災組織からいただいた最新の情報を、市対策本部内で速やかに共有できるようにしなければならない。組織を立ち上げているので、機能するようにしていく。</li> <li>・災害後の被害状況の調査については、どうしても縦割りになってしまう。土木課は、道路や橋梁、河川の災害査定を受けなければならないことから、専門的な見地から見回る必要がある。農地などは農政課が。危機管理課は、庁内でチームを組み、家屋などの私有財産の被害を把握するために聞き取りを行っている。なるべく調査結果が地域と共有できるようにしたい。</li> <li>・青河自治振興会で作成された被害に係る地図については、土木課や農政課とは情報共有しているが、どの程度活用しているかまでは把握していない。情報共有に努めていきたい。</li> <li>・頻発化する豪雨災害や将来の南海トラフ巨大地震など様々な災害リスクが高くなりつつある。防災の取組は、行政として最重要事項として、引き続き地域の皆さんと意見を交換しながら進めていきたい。</li> </ul>

## 2. 持続可能なまちづくりについてなど

項目	参加者の発言	市の発言
地域資源の活用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域では、どぶろくに加え、ノンアルコールの『食べる甘酒』をつくり、販売を始めた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナ禍でも、地域で頑張っておられた。今までは、米や野菜を生産して売っていただけであったが、ここ近年は、加工して付加価値を付けて、産直市やネット販売をされる状況である。他にはないものをつくるということは、地域の強みにつながると思う。三次市内でも、自分で栽培された野菜などを加工品にされている。例えば、ネギをネギ油に、ショウガをショウガのエキスを使った加工品をつくるなど、農業所得の増加や地域の稼ぐ力につながってきている。市の基本的なスタンスとしては、いかに地域資源を活用して、地域を元気にするのかということであり、しっかりと応援していきたい。</li> <li>・コロナ禍によって、食べものや健康志向などに関して、価値観が変わっている。トレッタ三次の農産物が売れている。地域の安心・安全な野菜などの特産物が売れる傾向にあり、地方都市が大きなチャンスを迎えている。『食べる甘酒』は、非常に楽しみである。</li> </ul>
地域の活性化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コロナにより、人も集まることができず、コミュニティのあり方を考えた。今は落ち着いており、体操などの各講座を少人数で行っている。</li> <li>・「こいこい屋」では、野菜を出したり、そばを打ったりして活気が出てきているように感じる。「こいこい屋」は、地域の方々が寄る場であり、話をすることが地域の活動力となる。野菜が売れることなど、年寄りの励みにもなっている。今までは、人任せであったが、消費者の意見を聞くことができる。お金儲けだけではなく、場に集まり、話をすることが、元気につながり、地域の活性化にもつながる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集まれないことが心配であった。ふるさと祭などのイベントが中止になり、別になくてもいいのではないかとこの雰囲気になることを危惧していたが、秋口から落ち着いてきており、市としてもできる限り応援していきたい。</li> <li>・このままコロナが落ち着いていけば、来年度は、みんなで喜び合える年度にしたいと思っている。現在、令和4年度の予算編成時期であるが、地域の方がもう一度頑張ろうという意欲のわくような事業や予算化を考えていきたい。三次市としては、笑顔やみんなの元気、感動を取り戻そうということが、来年度の大きなテーマである。引き続き、地域の方と汗をかいていきたいと考えている。</li> </ul>

# 令和3年度 まちづくりトーク 主な意見

開催日： 11月24日(水)

会場： 青河コミュニティセンター

項目	参加者の発言	市の発言
将来を見据えた指針	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三次市は、30年後、50年後、100年後の目標を立てているのか。</li> <li>・地域でもビジョンをつくるが、市のビジョンを基本指針にしており、できれば30年後、50年後のビジョンまで示してほしい。それが100%できるかどうかは別として、指針が欲しい。青河地区でも空き家が増えており、今後の状況もチェックしている。しかし、行政側の方向性が見えないと、青河地区もビジョンを立てにくく、自主自立でやらざるを得ない。</li> <li>・青河地区だけではないが、人口は減っており、将来の人口についてシミュレーションをしているが、心細い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本となるのは、まち・ゆめ基本条例である。100年後の計画はないが、10年後については、ビジョンを持っている。令和4年度に、これまでの10年間について検証を行い、皆さんに参加していただく中で、令和5年度に、新しい10年後の計画をつくるために、現在、準備を進めている。</li> <li>・国立社会保障・人口問題研究所(社人研)では、日本の将来推計人口を出しており、それに基づいて、介護保険計画や福祉計画など他の計画も立てている。</li> <li>・子どもが急激に増えることは考えられず、一定の人口の中で、その地域が持続可能となっていくためには、もう一歩先の将来ビジョンは大切であると思う。</li> <li>・高齢者であれば、健康寿命をいかに伸ばすのかということは重要な指標であり、高齢者の方が集まってお話をすることが地域づくりにつながるということは、市としても大きなヒントになる。そのような地道な取組も必要であり、大きなビジョンも持ちながら、地域づくりに取り組んでいきたい。</li> </ul>
支所	<p>支所をどうするのか。将来的には、どこかで終わらせないといけないと思うが、指標を示す必要があるのではないかと。支所から職員がいなくなるかもしれないし、自治連合会に運営を委託することになるかもしれない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域づくりや地域のあり方については、こうしなければならないということはないと思う。人が減る中でも、地域の特色を生かしながら、地域を持続可能なものにする。現在、藤山浩先生(一般社団法人持続可能な地域社会総合研究所 所長)と、各地域の特徴やいいものを見出すことによって、いいものを伸ばしながら地域づくりをしていくような取組を、具現化しているところである。</li> <li>・支所のあり方について、無くす、無くさないではなく、どのような地域振興が必要であるのかという大きなビジョンを持ちながら、本日のような機会をとらえて、地域の方と話をしていく必要があると考えている。地域を元気にさせていく、存続させていくためにはどうすればいいのか、日頃から話ができればと思う。合併して15年以上経ち、他の地域からも出てきつつあるので、地域の皆さんの問題意識が高いうちに、話をしていきたい。</li> </ul>
薬用作物	<p>薬用作物はどういう状況か。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広報みよしで経過報告をしているが、多くの方々から関心を寄せていただいている。今年度は、市内4か所で6品目を試験栽培しており、地域ごとに栽培状況の確認をしようとしている。今週、専門家に生育状況のチェックなどをしてもらうが、今のところ順調に栽培が進んでいる。来年度については、漢方薬剤を栽培していただけたところを探すにあたり、協議会を設立する予定である。</li> <li>・他地区のまちづくりトークでも聞かれることもあり、全国的に珍しい取組として、興味を持っていただいている。三次でしかできないことにチャレンジすることで、うまくいけば、農業所得の向上や地域独自の取組につながるなど、持続可能な地域に結びついてくると思う。今後も、色々な媒体で、情報発信を行っていく。</li> </ul>
広報について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政情報は、市広報紙や人から聞くことが多い。</li> <li>・市広報紙に入っているチラシについて、左と右とじのものがある。地域からすれば、どちらかに統一してほしい。市として、形式を決めたらどうか。</li> </ul>	<p>ケーブルテレビや音声告知放送などを活用しているが、情報発信するチャンネルも増やさないといけない。世代によって入手方法が異なるので、どのような方法を使って情報収集をしているのか分析しながら、今後の行政の情報発信の参考にさせてもらう。</p>